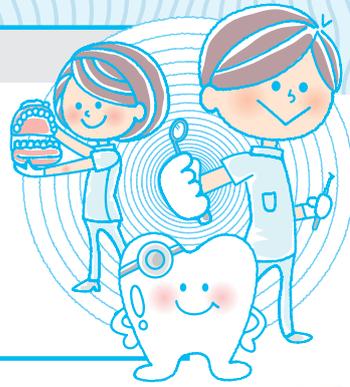


歯科医療 最前線

vol.2

〔 歯科医師の仕事 編 〕



むし歯を治すだけが歯科医師の仕事？

「口全体」のお医者さん 役割は大きく広がっています

「歯科医師の仕事は何？」と聞かれて、みなさんがまず思い浮かべるのは、むし歯、歯周病、歯並びを治すことではないでしょうか。確かに歯科医師は歯のスペシャリストです。でも、歯の治療は歯科医師の仕事の一部にすぎません。歯科医師は、舌や口の中の病気、口の周りやあごの病気、症状によっては首や顔までのとても広い範囲を診ています。「口腔領域全体」の健康管理が役割なのです。(口腔＝口の中全体)

例えば、あごが痛い、口が開かない、あごを動かすとカクカク音がするなどの症状が出る顎関節症という病気。あごの関節の中の関節円板のずれが主な原因で、ずれを戻す治療は歯科医師が行いますが、治療法も筋肉マッサージや温湿布から手術までと症状によって様々です。

口の中のがん、高齢者のケア 専門医の育成が急がれます

口の中にもがんはできます。舌や歯ぐきなどのがんを総称して口腔がんといいます。年々増加しています。がんですからもちろん命に関わる病気で、早期発見・早期治療が重要です。この口腔がんの手術を行っているのは、歯科医師である口腔外科医です。しかし、口腔外科の専門医は、まだまだ不足しているのが現状です。

また、高齢者ケアも人材育成が急がれる分野です。高齢者に多い、ものを飲み込む機能が低下する「嚥下(えんげ)障害」への対応もその一つ。肺炎や窒息を引き起こす場合が多く、防止には歯科医師の治療やサポートが必要になります。この嚥下障害のリハビリは言語聴覚士の専門分野でもあり、歯科医師と言語聴覚士が協力して治療にあたるのが理想的な私たちです。

歯科医学、歯学部では、全身的な医学の基礎を学び、口腔がんの手術や、口・のどの動きをよくする訓練法なども習得します。「口腔医学」という言葉で表されるように、体全体を知った上で口全体の健康を支えていくのが歯科医師なのです。

口の中には
いろんな病気が
あるんだね。



TOPICS

唾石治療用に極細内視鏡を開発しました。

だ液の通る管にできる石を唾石(だせき)と言います。大きくなって管をふさぐと唾液腺の細胞を破壊、ばい菌を殺すだ液が作られず感染源となってしまうため、全身麻酔で顔面を3cmほど切開し、腺ごと摘出するのが一般的です。でも私は様々な症例を見るうち、内視鏡治療ができるケースがあることに気づきました。そこでドイツのメーカーと世界最小の治療用内視鏡を共同開発。大きい唾石でも砕いて排出可能にしました。顔を傷つけず、局所麻酔でできる患者さんにやさしい治療法です。

内視鏡治療、画像診断の専門家を自負する私も、歯科医師です。

歯学部 中山 英二 教授

わが国口腔外科分野のIVR(Interventional Radiology/画像診断手技)を利用して検査と同時に行う治療、手術)を第一線で実践する歯学博士。



歯科医師・中山教授が設計し、ドイツのクラフトマンシップが発揮された治療用内視鏡。映像用光ファイバーが内蔵され、口内の唾液腺の出口から挿入して、モニタを見ながら唾石をつかむバスケット鉗子で摘出するという画期的な唾石治療法が実現しました。世界最小の治療用内視鏡は、その細さから、涙腺などへの応用も期待されます。